

特集

# 「インタビュー」で育てる力

国語の時間だけでなく、職場訪問や総合的な学習の時間などで、生徒がインタビューをする機会が増えています。しかし、実際に行ってみると、「話が続かない」「一問一答になってしまう」などの課題も多いようです。

インタビューをどのように指導すればよいのか、インタビューで身につく力は何か——プロのインタビュアーとの対談と、現場の実践から探っていきます。

## 「インタビュー」で世界を広げる

フリーライター

永江 朗

対談

お茶の水女子大学  
附属中学校教諭

宗我部 義則

これまで千人以上にインタビューをし、「インタビュー術！」などの著書もある永江さんと、現場でさまざまな実践をされている宗我部先生に、インタビューのおもしろさや、中学生にどのような指導が考えられるか、語り合っていました。

### 相手の言葉を引き出す

宗我部 永江さんは、インタビューのお仕事をたくさんされていますが、肩書きは、インタビュアーでなく「フリーライター」なんですね。

永江 ときどき「フリーター」に間違えられて、「いい歳なんだから、そろそろきちんとした仕事につきなさい」と言われたりするんですけども（笑）。私は、インタビュー、評論、エッセイ、取材……なんでもするので、「フリーライター」と名乗っています。

宗我部 今回、永江さんに、まず「インタビュー」と「取材」の違いについて、お聞きしたいのですが。

永江 ジャーナリズムの現場では、大きな違いはないと思います。一つあるとしたら、インタビューはあくまでインタビュー



特集

「インタビュー」で育てる力

イー（話し手）の言葉をどう引き出すかが重要だということでしょうか。以前、新刊を出した作家にインタビューしたとき、「言いたいことはこの本の中に書いてあるから」と言われたことがあります。確かに、本から抜き出して記事はできるかもしれませんが。でも、それでは意味がないんですね。インタビューは、たとえ本に書いてあることであっても、生の声で語ってもらわないと成り立たない。

**宗我部** 私たちは、インタビューという情報を集める一つの方法というか、「知りたいことについて聞く」ことをイメージしがいちです。ですから、質問に対する答えがとても重要だと思っているかもしれません。

**永江** 私は、インタビューがどんな人なのか、彫刻のように見せたいと思っっています。話した内容ももちろん大事ですが、話し方や表情をとらえて文章化できないだろうか、と、よく考えますね。例えば「そうぞう」という言葉一つをとっても、それがボソッとつぶやくように言ったのか、にこやかに大きな声で言ったのかでは、ずいぶん意味合いが異なります。だから、インタビューの口癖や語尾など、細かいところも気にするようにしています。そういう部分に、その人自身が表れたりします。

**永江** 知っていることを再確認するだけになってしまっていたら、それはいいインタビューとは言えないと思いますね。私はみっちり下調べしてからインタビューに臨むんですけれども、下調べの段階で、すでに世の中で知られているようなことは除き、まだ誰も聞いていない質問、インタビューイーも予想していなかったような質問を考えるようにしています。

**宗我部** 職場訪問や総合的な学習の時間で外部の人にインタビューする場合、中学生にも下調べさせるのですが、やはり子どもです。そこからプロのような深い質問を考えることはなかなか難しいんです。ですから、私は、子どもに質問を立てさせるとき、自分の考えを交えるように指導しています。

**永江** 自分の考えを？

**宗我部** 例えば、総合的な学習の時間を使って、「街のバリアフリーのあり方を考える」というテーマで、役所の福祉課の方にインタビューをします。そうしたら、まず、そのテーマについて知っていることを子どもの生活体験の中から思い出させ、それについて自分はどういう考えをもっているのかをまとめさせます。

その後、下調べをし、質問を考えさせ



### 永江朗

1958年北海道生まれ。フリーライター。2008年より早稲田大学文化構想学部教授（任期付）。洋書輸入販売会社に勤務後、雑誌編集者を経て、文筆活動に入る。現在、コラム書評・エッセイなど幅広く活躍中。その的確なインタビュー術に定評がある。主な著書に「インタビュー術！」（講談社現代新書）、「書いて稼ぐ技術」（平凡社新書）、「不良のための読書術」（ちくま文庫）など多数。

**宗我部** 話し手の言葉を引き出し、その人自身を浮かび上がらせるのがインタビューということでしょうか。言葉を引き出すためには、質問の形を工夫していく必要がありますね。

### 質問項目のつくり方

**宗我部** インタビューの準備というと、質問したいことを考えることばかりになりがちだと感じています。それだと「〇〇についてどう思いますか」「では、次の質問で

ます。「私はこう思うが、専門の方から見てどうなのか」「調べる中でこういうことがわかったが……」など、自分の考えをふまえた上で質問を立てさせるんです。

**永江** それはいいですね。

**宗我部** 中学生の場合は、わからないことを聞きに行くよりも、自分の考えをぶつけるつもりでインタビューさせた方が、相手とのやりとりができると思っただけです。自分の考えがあれば、インタビュー先でも相手の答えに「なぜ？」「でも〜では？」と重ねていくことができます。

す」と、用意した質問を順番に聞いていくだけの一问一答になってしまっただけが深まらない。子どもは素直ですから、先生が質問項目をたくさん考えよう」と投げかけると、質問を出すことに夢中になってしまっ「何のために聞きたいのか」という目的を見失いがちです。

**永江** 私は、大学でも教えているのですが、学生には、「質問項目は徹底的に絞りこみなさい」とよく言います。でも、質問はたくさん考えた方がいいので、まず百個考えさせる。そして、それを三十個に絞って、最終的には十個にする。その中で優先順位をつけて、上位のものから聞いていく、というように指導をしています。

**宗我部** そうやって、質問を絞り込んでいくことで、自分が聞きたいことが明確になっていきそうですね。

**永江** インタビューの時間は限られていますが、十個のうち一つしか聞けないこともあります。だからといってインタビューが失敗したというわけではありません。逆に、十個すべて聞けたからといって、いいインタビューとは限らない。

**宗我部** 質問が聞けたのに必ずしもいいインタビューでないというのは、例えばどういうことですか。

**永江** すばらしい。仮説を立てていくわけですね。その場合、むしろ仮説が崩されると、おもしろい記事になるんですよ。また、こちらが仮説を立てて尋ねると、普段は持論をとうとうと述べるインタビューイーが、感情をあらわにして、真剣に対峙してきました。そういうときの記事は生き生きとしたものになるんです。

### 失敗した方がいい

**永江** それから、私は、中学生にはぜひ「子どもの特権」を生かしてインタビューしてほしいなと思います。

**宗我部** 子どもの特権？

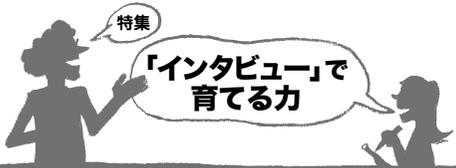
**永江** 私のような五十歳を過ぎたおじさんは聞けない質問でも、中学生なら聞けますよね。その特権は存分に生かしてほしい。そういう意味で糸井重里さんは天才的な聞き手だなと思います。彼は、ある会社の社長に「人間、お金をもつたら変わりますか」とか、いい歳してこれは聞けないよねってこともストレートに聞くんです。中学生にこそ、そういうインタビューをしてほしい。

**宗我部** なりふり構わず突っ込んでいくのは、中学生だからこそできることかもしれませんね。逆に教師が指導しすぎると、そ



### 宗我部義則

1962年埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題（中学校国語）」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。編著書に「群読の発表指導・細案」（明治図書出版）など。光村図書中学校国語教科書編集委員を務める。





# 中学生には、自分の考えをぶつけるつもりで

インタビューさせたい 宗我部

**宗我部** 子どもたちが失敗しないようにと、つい固く考えがちですが、もう少し柔軟になるべきかもしれません。

**永江** 失敗できるのは若いうちだけですからね。

## 話し言葉と書き言葉は違う

**宗我部** 永江さんは、インタビューの現場で失敗したことがありますか。

**永江** 小さな失敗ならたくさんありますよ。私はテープ起こし(※)を自分でするので、インタビューの録音テープを聞いていると「なんてバカな質問をしたんだろう」とか「聞き間違えたまま次の質問をしている」ということがあります。テープ起こしを外注するライターも多いですが、私は自分でテープを聞き、質問の仕方、間とり方、言葉づかいなどを反省して、次を生かすようにしています。

また、テープ起こしをしていると、話し言葉と書き言葉は、根本的に違うということ

とを痛感します。人から話を聞いて、それを文章化するということは、頭の中で話し言葉から書き言葉へコード変換しているわけです。子どもたちにインタビューをさせる際、それを自覚させることも大事なかなと思いますね。学校でICレコーダーを使っているんですか。

**宗我部** レコーダーの台数が限られていますから、どうしてもメモが中心になります。

**永江** レコーダーは安いものだと三千元ぐらいで買えるので、ぜひ子どもたちに使わせてみてほしい。もし私が教師だったら、レコーダーを一人一台渡してインタビューをさせたいですね。その音声を取った通りに文字にし、そこから読みやすい言葉にどう変えていくかという授業をしてみたいと思います。

**宗我部** それ、すごくいい勉強になりそうです。対話しているときは整然とした話に聞こえていたのに、実際に文字に起こしてみると話が行ったり来たりしていたり

(新潮社)で黒柳さんにインタビューされていますね。この本では、糸井重里さんやジャーナリストの田原総一朗さんなど、プロの聞き手の、話の引き出し方や聞き方などの「聞く技術」が紹介されていて、とても興味深く拝読しました。

**永江** それぞれが独自のノウハウをおもちゃなので、とても勉強になりました。田原さんは、黒柳さんとは対照的に、相手に斬り込んでいきます。「なぜですか」「あのときあなたはこう言ったでしょう」と畳みかけるように質問を投げかけ、どんどん核心に迫っていくタイプです。

**宗我部** 今、お話をうかがって、それぞれのインタビューの技を、子どもたちに示してあげたいなと思いました。まず、子どもたちにインタビューをさせて、自分なりの「インタビューのコツ」を出させた後に、「黒柳さんはこうやっているよ」「永江さんはこんなふうにいるよ」と紹介する。インタビューによって、聞き方や話の引き出し方がずいぶん違うということに気づ



※テープ起こし  
ICレコーダーなどに収録された音声データを、そのまま文字原稿に起こすこと。

「あー」とか「へー」とかが入っていたりすることに、子どもは驚くでしょうね。

**永江** 書き言葉にするとメチャクチャなのに、インタビューの場面では話を通じてコミュニケーションが成立しているというのは不思議ですよ。それに気づくことは、言葉の世界を拡張していくことにもなると思います。

## 名インタビューアーに学ぶ

**宗我部** 以前、テレビ番組の『徹子の部屋』を、私がすべて文字起こしして、子どもたちに見せたことがあります。そして、「黒柳徹子さんはインタビューの名人なんだよ。プロからその技を盗んでみよう」と投げかけました。すると、文字原稿を読んだ子どもたちの第一声は、「先生、この人は本当にインタビューがうまいんですか」でした。



インタビューは、失敗した方がうまくなりますよ

# インタビューは、失敗した方がうまくなりますよ

永江



特集

「インタビュー」で育てる力

かせたいです。それから、「自分はどの人に近いだろう」と考えさせてみたいですね。

## 身近な人の話を引き出すには

**宗我部** ところで、中学校二年の教科書には、「小さな『物語』を探る」という教材があります。身近な人にインタビューして、それを「聞き書き文集」にするというものですね。例えば、親や友達にインタビューする場合は、事前の下調べがしにくいので、質問をつくるのが難しいことがあります。そういうとき、プロならどうするかお聞きしたいのですが。

**永江** 下調べができないので、その場で調べるとい感じになるでしょうね。それか



**永江** 文集にして読んでもらうことまで考えると、リーダーブルであることが求められますね。リーダーブルには二つ意味があつて、一つは読みやすさ、もう一つはおもしろさです。正しいことが書いてあつても、読む気がしないものはリーダーブルであるとは言えません。中学生にどこまで求めるのかは難しいところですが、楽しい文集ができれば、子どもたちも「インタビューしてよかつたな」と思うはずですよ。こんなふうによめてごらん、とモデルを示してあげてもいいですね。昨年はこんな文集を作ったよと先輩が作ったものを見せると刺激になるかもしれません。

**宗我部** そういう子どもの手の届きそうなモデルというのは、いいですね。子どもたちが活動しやすくなります。

## 他人の言葉を引き出すことによって、違う世界に出会えるんです

永江

ら、自分との距離が近い人は、かえってインタビューしにくい場合があるんです。照れてしまったり、「これは聞けないな」と遠慮してしまったり。そういうときは、「小道具」があると、話しやすいです。

**宗我部** 「小道具」、ですか？

**永江** いきなり「おばあちゃんの若い頃がどうだったかを教えて」と聞くのではなく、例えば、「〇歳のときに結婚して、〇歳のときに子どもを産んで……」と、いつしよに「年表」を作りながら聞いていく。面と向かって話をするのが恥ずかしい人でも、「年表」という「小道具」を使って作業しながらだと、わりと話しやすいんです。

**宗我部** ああ、なるほど。親しい人だと、その作業自体が楽しくなりそうですし、作業する中でいろいろと思ひ出しそうです。すごくいいアイデアですね。ぜひ授業でやってみたい。スピーチ指導で、「シヨウ・アンド・テル」と言つて、子どもに物を持たせてスピーチをさせるというのがあるんですが、そうすると、子どもは人前で話す

ことへの抵抗感がぐつと下がるんですね。物を仲立ちにするというのは、確かに、インタビュー指導でも使えそうです。

それから、新版教科書には、一年一学期に「友達をみんなに紹介しよう」という教材が入りました。友達を取材して紹介するというものです。入学したての子どもたちの中には、自分について話すことに抵抗を感じる子もいるかもしれません。でも、「小道具」があれば、ぐつと話しやすくなりそうです。

**永江** 「思い出の写真」を持ってこさせてもいいし、鉛筆でもボールでも、「今の自分を表している物」を持ってきて、物に語らせるというのでもいいかもしれませんね。

**宗我部** 二年の「小さな『物語』を探る」では、最後に「聞き書き文集」を作るんですが、私はインタビューのまとめ方、聞いたものをどう生かすかということがとても大事だと思つています。インタビュー指導は、ともすればインタビューすること自体が目的になってしまう場合があるので。

## 自分の世界が広がる

**宗我部** 最後に、子どもたちがインタビューを学ぶ意義について、永江さんのお考えをお聞きたいのですが。

**永江** ふだん同年代の子と接している子どもたちが、インタビューで外に出かけていくと、自分とまったく違う大人と会うわけです。他人に会うのは緊張するけれど、インタビューをすることで、まったく違う世界にぶつかっていく勇氣もてるようになるんじゃないでしょうか。

実を言うと、私はいまだにインタビューに出かけるとき、心配になつて気が重くなるんです。

**宗我部** えつ、永江さんでも？

**永江** 初対面の人と会うときは、やはり緊張します。でも、実際に会つて話を聞き始めると、いつのまにか夢中になっています。思いもよらないことを知ることができたり、こんなふうにも見る人がいるんだと驚いたり。そのたびに、インタビューしてよ

## インタビューで、 コミュニケーションの力を 身につけさせたいですね

宗我部

**宗我部** インタビューによつて、人とふれあい、言葉でつながっていく。それで、自分の世界がぐつと広がるんですね。永江さんからたくさんアイデアをいただいで、新しいインタビューの単元を作りたくなくなりました。今日は本当にありがとうございました。

特集

「インタビュー」で育てる力